

平成 26 年度 法科大学院（法務研究科）入学試験

# 小論文問題紙

C日程

平成 26 年 2 月 23 日

10 : 00 ~ 12 : 00 (120 分)

(200 点)

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題を開いてはいけない。
2. 小論文の問題紙は 1 ページから 4 ページである。
3. 解答用紙は、問題 1 問 1、問題 1 問 2、問題 2 の 3 枚である。解答用紙の追加は認めない。
4. 解答用紙は 3 枚ともかならず提出すること。
5. 監督者の指示に従い、すべての解答用紙に受験番号と氏名を記入すること。
6. 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
7. 試験終了まで退室してはいけない。

北 海 学 園 大 学

問題1 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい（100点）。

近代の「成長」を先導してきた西洋の価値観は行き詰まりを迎えているのではないか。  
こうした問いに接するたびに私は3つの違和感を覚える。

○

○

(1) そもそも「西洋の価値観」という括り自体が、西洋から東洋に注がれる偏向した視線（オリエンタリズム）の裏返しに近い乱暴なものだが、西洋には直線的な「成長」に対する懐疑の伝統がしっかりと存在する。今日でも、エネルギーや資源、交通、都市開発などに関する代替モデルの研究開発に最も熱心なのは欧米の大学や財団、研究所、企業である。これまでの「近代」の弊害を自省し修正しようとする「再帰的」側面を無視して「西洋の行き詰まり」を説く論法は、左であれ右であれ、戦前の「近代の超克」論と大差ない。

(2) 欧米の市井の人々は決して「成長」至上主義者ではない。私は大学院以降、欧米で10年近く過ごし、先月はフランス屈指のエリート養成機関であるパリ政治学院で客員教授を務めたが、身近な人間関係の機微に気を配り、おそらく昔とそう変わらぬ日常の暗黙知の中に生き、質素で素朴な暮らしをしている人が大半だ。この点はアラスカ以外の全州を訪れた米国についてもほぼ同じ印象である。彼らは「西洋の価値観」の体現者ではないのだろうか。

(3) 東日本大震災や福島第一原発事故以降、日本では近代文明を否定し、あたかも近代以前の共同体への回帰を志向するような論調が散見される。しかし、その具体像はあまりに情緒的で現実味を欠き、少なくとも欧米では—— 社交辞令としてはともかく—— 真剣に相手にされることはなかろう。かつて欧米では「未開民族」を「高貴なる野蛮人」とロマン化した時期があったが、それはあくまでも文学の話であって、政策の話ではなかった。

○

○

こうした理由で私は「西洋の行き詰まり」論に与しない。むしろ「再帰的近代」の可能性を信じており、それこそが理想的かつ現実的な選択だと考えている。近代には女性や有色人種、身障者などを排除し、環境に極度の負荷をかけながら「成長」に邁進した時期があったが、それを自省し修正しようとする試みを論理的・倫理的に後押ししているのも、また近代である。

もちろん、欧米社会が「再帰的近代」を完全に志向・体現しているわけではない。し

かし、「西洋の行き詰まり」を一方向的に断定し、前近代ないし反近代的な紐帯——原理主義的であれ相対主義的であれ——を憧憬することは危険ですらあると考える。私は最近、インドやベトナム、ウガンダなども訪れたが、これらの国々も前近代ないし反近代を志向しているとは思えなかった。

○

○

欧米社会を俯瞰して、私がむしろ危惧するのは「消費者至上主義」とでもいうべき傾向、例えば、「低価格」こそは「正義」であるかのような風潮だ。それは往々にして、製造業に対する小売業の優位を意味し、「コスト削減」や「効率化」などの名目で、末端の生産者や労働者に過大な圧力を課すことになる。当然ながら、雇用は不安定になり、労働者の権利は蝕まれる。これは1980年代以降の米国でとりわけ顕著になった傾向だが、グローバル化が進む今日、日本を含め、他の国とて無縁ではいられない。

例えば、エネルギーや資源の節約を本気で考えるならば、コンビニは24時間営業を自粛すべきかもしれない。しかし、それは「お客（消費者）のため」という大義に反するし、企業としての「成長」も鈍化させてしまう。「消費者至上主義」のもとで直線的な「成長」への誘惑を断つことは容易ではない。

ただし、私たちの多くは「消費者」であると同時に「労働者」でもある。両者は本来的に不可分であり、どちらか一方の権利のみが偏重されることは不自然かつ不健全であろう。

価格やサービスのみを競うのではなく、高いレベルの賃金や雇用環境をも競い合うような仕掛けをどう構築すべきか。これこそが「西洋の価値観」を否定する前に、皆で知恵を出し合うべき問いではないだろうか。

渡辺靖（慶応大SFC教授、アメリカ研究）「寄稿：弊害を自省する「近代」の可能性」

「毎日新聞」 2013年11月13日（水）

問1 筆者のいう「再帰的近代」とは近代社会がもたらしたものに対する一つの有りうる態度であるとして、それはどのような態度であるか、説明しなさい（50点）。

問2 筆者が批判する「消費者至上主義」とはどのようなことか、説明しなさい（50点）。

問題2 次の文章を、下記の問いに答えなさい（100点）。

「和食」がユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界無形文化遺産として12月に登録される。政府は登録をきっかけに、和食を海外に積極展開し、日本産の農水産物の輸出拡大も図る考えだ。私たちも、その奥深さと可能性に再認識し、すたれさせることなく伝えていきたい。

日本の無形文化遺産は歌舞伎、結城紬などに次ぎ22件目。食の関係ではフランスの美食術、イタリアやモロッコの地中海料理などがすでに登録され、今回は韓国の「キムチとキムジャン文化」も内定した。

和食が、世界に誇るべき特色はいくつもある。

まず、自然を大事にしている点だ。素材の旬にこだわり、地域の風土・気候に根ざし、材料を最後まで使い切ってむだにしない。

また、見て美しく楽しい。どこからながめても同じ姿の対照的な盛りつけではなく、四季のうつろいも取り込んで食べる人を喜ばす。

多様な調理法も例を見ない。生のほか、焼く、煮る、蒸す、揚げる、あえる、発酵させる、干すと幅広い。この結果、包丁などの道具、食べ物を盛る皿や器も多彩だ。

さらに「だし」に代表されるうま味の土台をつくっている。うま味は5番目の味覚として、英語でも「UMAMI」と表現される。そして、動物性脂肪が少なく食物繊維は多いので、健康にいい。

こうした特色に加え、「おせちと正月」など年中行事に深くかかわり、家族や地域の絆を生んできた文化的な側面も評価された。

国際的に和食は注目を浴びている。日本食レストランは各国で人気だし、欧米の料理人には「だし」を使ったり、ゴボウやカブ、ユズなどの食材を用いたりする動きがある。

こうした一方で、和食の未来を支える足元は危うい。

家庭でもアジアや欧米の料理が、手軽に食べられるようになった半面、和食に親しむ機会は減った。伝統野菜など地域独自の食材や昔ながらの調理法は、大量生産が進む中で途絶えかけているものもある。

食品会社が2011年に発表したアンケートによると、「昆布、かつお節、煮干しなどの素材からだしをとっている」との回答は2割にすぎない。一人きりで食べる「孤食」や、家族一緒でも各自がばらばらに好きなものを食べる「食卓崩壊」という現象も近年問題になっている。

世界への売り込みも大事だが、学校や地域で和食の魅力を味わい、特色を学び、食材や調理法を受け継いで行く取り組みが欠かせない。和食に育まれた私たち自らが、世界に向

かって胸を張って、その価値を語れるようにしよう。

出典：毎日新聞 H25・10・27（日）社説

問 「和食」という食文化が守られ世界に普及するためには、必要な条件があるであろう。上記の社説は、「孤食」化して崩壊する家庭料理から、家族の絆を保つことを通じて家庭料理（和食）を復権させることが必要であり、あるいは、地域の食材に関する知識を広める教育などが必要であると述べている。

それ以外にも様々な課題がありうるだろう。たとえば、ホテルやデパートにおける食材の偽装表示の問題、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）におけるコメなど農産物の関税廃止の問題、日本の農家の戸数の減少と高齢化問題、マグロ、ブリ、カニなどの水産資源の枯渇問題、狂牛病など食肉の安全性の問題、気候変動の農産物への影響の問題などが挙げられるであろう。このような課題があるなかで、和食文化の保護と世界への普及のためにあなたが重要だと思う課題を挙げて（上記に挙げた例以外でもよい）、和食の保護と普及のためにどうすべきか、あなたの考えを自由に述べなさい（100点）。